



ACS日本支部ニュース

NEWSLETTER FROM THE JAPAN CHAPTER
OF AMERICAN COLLEGE OF SURGEONS

2022. Apr. Vol.13

主な内容

- ACS Japan Chapter President/Governor ご挨拶 P1
- ACS日本支部 Councilorからのメッセージ P2
- 井口潔先生を偲んで P3
- 新ACS Fellowになりました P4
- 新ACS Fellowになりました P5



ACS Japan Chapter President/Governor ご挨拶

国立国際医療研究センター理事長
東京大学名誉教授

国土 典宏

Norihiro Kokudo, MD, PhD, FACS, FRCS

Covid-19 流行が始まって丸2年が過ぎましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか？直近のオミクロン変異株の流行では、その感染力の強さから医療従事者やその家族の感染も相次ぎ、Covid-19 以外の疾患に対する医療提供体制も危機に瀕しています。私共の病院でも本文章執筆現在、外科手術を大幅に制限せざるを得ない状況に陥っています。日本支部会員の皆様もそれぞれの職場で外科医療を守るために日夜奮闘されている事と存じます。この場を借りて敬意を表します。

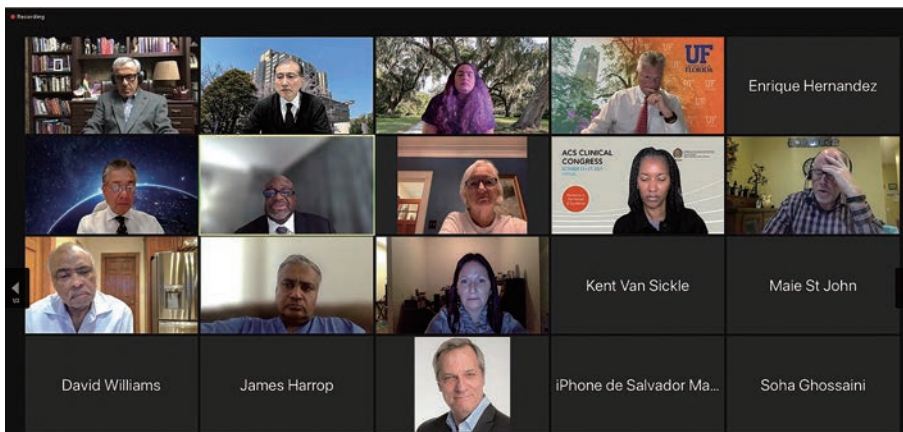
Covid-19 流行のために各種学会もオンラインやハイブリッド形式の開催をまだ強いられています。本年4月熊本開催の日本外科学会学術集会もハイブリッド形式となり、会期中に開催する各種学会の会合はオンライン開催とするよう要請されました。ACS日本支部年次総会も昨年につきオンライン形式での開催となることを大変残念に思います。さて、昨年日本からは16名のNew fellowsが誕生しました。新型コロナ禍で国際学会に参加しづらい状況の中で応募いただいた先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、ACS本国である米国の状況は日本より感染流行収束が早いようで、春以降の学会をface to faceで行おうという強い要

求があるようです。本年10月にSan Diegoで開催予定のClinical Congressでは現地で日本支部会員の皆様と是非お会いしたいと願っています。現状ではまだオンラインですが、ACSが企画する多くの各種委員会や会員向けWebinarが頻回に開催されています。会員の皆さんには定期的にメールでのご案内が届いていると思いますので、興味があるものを選んで是非視聴してみてください。

私自身はGovernorの一人としてGovernors Chapter Activities International Workgroupのメンバーとなりました。まだオンライン会議しかできない状況ですが少しずつ活動を始めたいと思っています。外国人外科医の日本へのObservershipの推進もその任務の一つで、Covid-19感染が落ち着き外国人の入国制限がもう少し緩和されればと期待しています。また、日本支部からは東京慈恵会医科大学葛飾医療センター外科の川瀬和美先生がWomen in Surgery Committee (WiSC) 委員として活躍されていました。Diversity and Inclusionは世界の大きな潮流であり、ACSとしても重視しています。日本支部としてもこのムーブメントを支援したいと思っています。

Covid-19 流行の今後を予測することは困難ですが、今年こそは日本支部会員の皆様が一同に会し交流できる機会があることを祈りつつ、ご挨拶の言葉といたします。



2021.10.8 Governors Chapter Activities International Workgroup オンライン会議風景

略歴

- 1981年 東京大学医学部医学科卒業、同第二外科研修医
- 1987年 東京大学第二外科助手
- 1989～91年 米国ミシガン大学外科留学
- 1995年～ 癌研究会附属病院 外科医員（2001年 同医長）
- 2001年～ 東京大学肝胆膵外科 助教授
- 2007年～ 東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科 教授
- 2017年～ 国立研究開発法人国立国際医療研究センター 理事長（現在に至る）
- 2012～16年 日本外科学会理事長
- 2018年 第118回日本外科学会会頭
- 2015～17年 A-PHPBA President
- 2020～22年 IHPBA President



ACS 日本支部 Councilorからのメッセージ



東京慈恵会医科大学葛飾医療センター外科

川瀬 和美

Kazumi Kawase, MD, PhD, FACS

2021年よりACS日本支部のCouncilorを拝命いたしました。今回Councilorからのメッセージということで、私のACSとの関わりについて述べさせていただきます。

私がACSに初めて参加したのは1989年アトランタで行われた75th Clinical Congressになります。当時研修していた三井記念病院では、毎年2~3年目のレジデント数名がACSの学会に参加し、その前後約1か月間自分たちで見学したい施設を訪問できるという素晴らしいプログラムがありました。初めてのアメリカの学会ということで張り切ってPost Graduate Courseなど選択したのですが、内容がほとんど理解できませんでしたが、ACSは年1回の大規模な外科医の交流の場、というのが私の当時の認識でした。帰国後母校の慈恵医大外科に戻り、当時チェアマンであられた矢永勝彦先生の推薦を頂き、日本外科学会の外科医の地位向上アクションプランワーキンググループに、またそこで兼松隆之先生から女性医師支援委員会副委員長の機会をいただいたことがきっかけで、男女限らず外科医がやりがいを持ちしっかり働ける環境を作る必要性を痛感し、積極

的に行動し周囲に働きかけよう意識するようになりました。ちょうどその頃、MDACCのフェローで一緒だったDr. Tara BreslinからAssociation of Women Surgeons (AWS)へのお誘いを受け、続いて2010年日本女性外科医会 (JAWS) 創設、2011年万国外科学会でのAWSとJAWSのジョイントセッション計画とも相まって、2010年AWS総会と同時開催されるACSの学会に再び参加しました。また2011年ACS主催のリーダー育成プログラムSurgeons as Leadersに自ら参加、2011年にACSのFellowとなることもできました。Convocation Ceremonyでの緊張と感動、またNew Fellowたちの晴れやかで自信にあふれた態度を見て、彼らの外科医としての誇りの強さを実感させられた思いは忘れられません。更に2012年、Dr. Hilary SanfeyよりACSのWomen in Surgery Committee (WiSC)への推薦を頂き、初の海外からの委員会参加となりました。AwardのSubcommitteeに所属し、日本にも非常に優れた女性医師がいることをアピールするべきと、2016年に九州大学の水田祥代先生、2019年に藤田大学の加藤庸子先生を推薦させていただきHonorary Fellowshipを受賞できました。WiSCの活動を通して、毎年日本外科学会の会期中開催されるJAWSの朝食会にもDr. Patricia Numann, Dr. Brent Eastman & Sarita Eastman, Dr.



2011年 Convocation Ceremony 後、President Dr. Numann、吉田和彦先生、森俊幸先生とともに撮影

Carlos Pellegrini, Dr. Courtney Townsend, Dr. Barbara Bass, Dr. Ronald Maier, Dr. Valerie Rusch、と歴代のACS Presidentが参加され、日本の女性外科医を激励して下さいました。WiSCの任期終了後International Relations Committeeに立候補し2019年より委員を務めております。今回これに加え、Councilorの機会も与えていただきました。これまでに数えきれないチャンスを皆様から与えていただいた事に深謝するとともに、ACSは努力してやる気がある人には人種や出身地、出身校など

関係なく機会を与えてくれる素晴らしい組織だと感謝しています。日本の外科医は非常に優秀でアメリカで活躍する先生方も増えていますが、アメリカでは医学生やレジデントも積極的に学会活動に参加しています。ACSにはMedical Student/Resident Membershipもあり、特に若い先生方に参加いただき、その能力を積極的に発信していただきたいと思います。今後も現在の自分の立場でできる限りのことをACS日本支部の皆様と行いたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。

略歴

1987	東京慈恵会医科大学卒業
1987 - 1992	三井記念病院外科レジデント研修
1992 - 1996	東京慈恵会医科大学大学院
1996 - 1998	東京慈恵会医科大学外科学講座第1助手
1998 - 2001	テキサス大学 M. D. Anderson Cancer Center Department of Surgical Oncology 研究留学
2001 - 2003	東京慈恵会医科大学外科学講座第1助手
2003 - 2005	テキサス大学 M. D. Anderson Cancer Center, Breast Surgical Oncology Fellowship Program 臨床フェロー
2005	東京慈恵会医科大学外科学講座助教
2008	同講師
2016	同准教授
2012 - 2017	ACS Women in Surgery Committee 委員
2018 -	ACS International Relations Committee 委員

Over **130** years of Caring

1886年からずっと。

ETHICON

製造販売元: ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 メディカルカンパニー 〒101-0065 東京都千代田区神田3丁目9番2号

133481-000226 ©16.JRK 2020

Shaping the future of surgery

ETHICON

製造販売元: ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 メディカルカンパニー 〒101-0065 東京都千代田区神田3丁目9番2号

133481-000226 ©16.JRK 2020



井口 潔先生を偲んで

国際医療福祉大学大学院教授
東京慈恵会医科大学名誉教授

矢永 勝彦

Katsuhiko Yanaga, MD, PhD, FACS

心から敬愛する井口 潔先生に哀悼の意を表して

杉町圭蔵 九州大学名誉教授
前原喜彦 九州大学名誉教授
矢永勝彦 東京慈恵会医科大学名誉教授、
前 ACS Governor・日本支部長
森 正樹 九州大学名誉教授、大阪大学名誉教授

新型コロナウイルス感染症の第五波の中、東京オリンピックに続いて開催されたパラリンピックの終了日の9月5日、まさに閉会式開始直前に井口 潔先生が永眠されました。もう少して100歳の誕生日を迎えられる矢先のことで、その知らせに茫然自失の思いであります。

井口先生は1963（昭和38）年に母校の九州大学の第二外科教授に就任され、その後、22年間に渡り外科医、そして理学部で学んだ基礎科学の背景を持つ医学者として九州大学第二外科を主宰され、主に消化器外科と血管外科の領域で、特に食道疾

患、胃癌、肝癌、門脈圧亢進症に対する治療や血管外科の手術器具開発に貢献されました。特に、食道静脈瘤のみを選択的に減圧する「左胃-下大静脈シャント術」（井口シャント）を考案され、その成果を1968年のLancet誌に掲載されました。

井口先生は早い時期から外科医の国際性の重要性を認識されて、日本外科学会の英文誌“Japanese Journal of Surgery”の発刊にご尽力され、また ISDE (International Society for Disease of the Esophagus) の創設に力を注がれ、1986年にはACSから本邦で7人目のHonorary Fellowに推

戴されました。また、多くの後進に海外留学の機会を与えられ、研究成果を英文原著論文にまとめる重要性、国際学会での活動の意義を説かれました。そして、教室訓である「Erstens persönlichkeit, Zweitens wissenschaft (一に人格、二に学問)」に則り、多くのAcademic Surgeonを育成し、全国の大学に教授として輩出されました。

九州大学を定年退官された後は、佐賀県立病院好生館の館長として指導力を発揮されました。同時に、「生物学的なヒトを人間にまで育てる営み(ヒトの教育)が教育の基本である」とする理念に基づいて、2005年「ヒトの教育を考える会」、2019年には特定非営利活動法人「ヒトの教育の会」を設立し、熱心に教育活動を行われました。特にヒトの感性の発達の重要性に着目され、情操教育や数量化しにくい領域における教育の重要性を力説され、自らも九州大学退

官前に再開されたピアノ演奏の腕前を、時折公的な場で披露されました。

以上のごとく、井口 潔先生は外科学分野において手術や臨床研究の礎を築き、優れた後進を育て、医学界のみならず一般教育分野にも多大な貢献をされ、後学らに高い目標を達成する、あるいは人格を磨く刺激を与え続けられました。

新型コロナウイルス感染症が蔓延する中でのご逝去で、葬儀は近親者のみで行われました。後日、九州大学第二外科主催の教室葬が予定されているようですので、今はACS日本支部の会員の皆様の心の中で、井口 潔先生が安らかな眠りにつかれますよう、お祈りいただければ幸いです。

なお、そのような中、2021年10月1日の閣議にて、井口 潔先生の正四位の叙位が決定されました。ここに謹んでご報告いたします。



故 井口 潔先生

Kiyoshi Inokuchi, MD, PhD,
FACS(Hon)九州大学名誉教授、
佐賀県立病院好生館 名誉館長

略歴

1921年(大正10年)10月21日 生

1945年(昭和20年)9月 九州帝国大学医学部 卒業

1947年(昭和22年)10月 九州大学 助手(第二外科)

1950年(昭和25年)4月 東京大学理学部化学教室 研究生

1951年(昭和26年)4月 お茶の水女子大学理学部化学研究室 研究生

1952年(昭和27年)11月 お茶の水女子大学 助手

1953年(昭和28年)7月 お茶の水女子大学 講師

1957年(昭和32年)6月 九州大学 講師(第二外科)

1957年(昭和32年)8月 九州大学 助教授(第二外科)

1963年(昭和38年)4月 九州大学 教授(第二外科)

1975年(昭和50年)4月 九州大学医学部 病院長

1985年(昭和60年)3月 九州大学 教授退官、名誉教授

1985年(昭和60年)4月 佐賀県立病院好生館 館長

1989年(平成元年)3月 佐賀県立病院好生館 名誉館長

2021年(令和3年)9月5日 永眠

(学会役員等)

1968年 日本門脈圧亢進症研究会 会長

1977年 第15回日本本癌治療学会 会長

1978年 第78回日本外科学会 会長

1979年 第21回日本脈管学会 会長

1981年 Society of Vascular Surgery (America): Honorary Member

1985年 UICC日本国内委員会 委員長

1986年 American College of Surgeons: Honorary Fellow

1986~1989年 The International Society for Disease of the Esophagus: President

1986~2002年 がん集学的治療研究財団 理事長

1986~2006年 The International Society for Disease of the Esophagus: Secretary Member

1998年 The International Society for Disease of the Esophagus: Distinguished Member

(主な受賞)

1980年 西日本文化賞

1984年 日本医師会医学賞

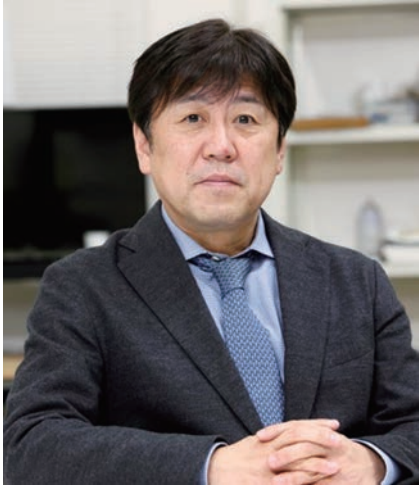
1996年 勲2等瑞宝章 受賞

Better Health, Brighter Future

タケダは、世界中の人々の健康と、輝かしい未来に貢献するために、グローバルな研究開発型のバイオ医薬品企業として、革新的な医薬品やワクチンを創出し続けます。

1781年の創業以来、受け継がれてきた価値観を大切に、常に患者さんに寄り添い、人々と信頼関係を築き、社会的評価を向上させ、事業を進展させることを日々の行動指針としています。

武田薬品工業株式会社
www.takeda.com/jp



新 ACS Fellow になりました

国立がん研究センター東病院 大腸外科長 手術機器開発分野長

伊藤 雅昭

Masaaki Ito, MD, PhD, FACS

コロナ禍の人類まれにみる大変な時期をお過ごしの中、医療者として様々な困難な状況に直面してもなお、日々最善の医療の提供にご尽力されていることと存じます。このような時期にもかかわらず、2020年度に名誉のある ACS Fellow の授与を賜り、非常に喜ばしく思っております。きっかけとしては、日本の何人かの諸先輩方よりこの名誉に授かる ceremony の素晴らしさをご教授いただき、一念発起して申請するに至ったわけであります。授与された年がたまたまこの大変な時期と重なり現地開催に参加することができず、自動的に諸先輩方をご経験された厳かな ceremony に参加できなかったことは若干残念ではありますが、ACS Fellow がもつ本来の意味を考えてみますと、一時の幸せな時間を経験できなかったことよりも今後継続してこの名誉を後進に引き継ぐ活動こそが重要ではないかと思っています。

この書面をお借りしまして、少しばかり私の紹介もさせていただければと思います。私は平成5年に千葉大学医学部を卒業し、当時の第一外科に入局しました。当時なぜ外科医の道を選んだのかという点については、明確な将来展望やモチベーションがあったわけではありません。ただ一つのきっかけとして、医学部時代に読んだ米国外科医に関する二つの書籍が僕を外科学への道に導いたように感じます。一つは「Surgeon: 外科医」という書籍であります。米国の外科医の日常生活が淡々と描かれている本の中で、たくさん

の症例を忙しくこなしながら、スキルアップしていく若き外科医の様子が瑞々しく描かれ、自分の将来像に重ね合わせていたりしたものでした。もう一つは「The Puzzle People」です。肝移植の父といわれている Pittsburgh 大学の Starzl 先生の自伝的な書籍です。挑戦的かつ意欲的に治療開発に取り組む内容に触れ、理想的な外科医像として一人の医学生に胸に強く印象を残しました。結果として、自分は肝移植の分野にも進まず、米国留学もすることなく日本の大腸癌外科治療にほとんどの外科医人生を費やすことになりました。

私はもうそろそろ外科医になり30年になろうとしています。この間外科治療は大きく変革し、開腹から内視鏡手術、そしてロボット手術と外科治療の主演は少しずつ変化しています。私は自分の外科医人生の多くの時間を国立がん研究センター東病院で過ごしたわけですが、大腸がんの四半世紀の歴史の中を駆け巡ってきた印象です。1999年に恩師である齋藤典男先生が日本で初めてISR手術を始め、肛門温存の歴史の扉が少しずつ開いていくのを身近に見ることができました。その後私はISRを腹腔鏡手術で行うことにチャレンジしました。当時は暗中模索のような時期もありましたが現在では世界中で広くこのような手術も広まっていることに驚かされます。約10年前には日本で初めてTaTME手術を行い、今やほとんどの直腸癌手術は当院ではTaTMEによって行われるようになっていきます。この手技は今後世界の大腸外科医

師が習得すべき技術の一つになるであろうと強く感じています。また、国立がん研究センターでの手術機器開発を主導する立場も拝命し、国立がん研究センター認定ベンチャーによる手術支援ロボットやAI技術の外科応用などの研究開発にも従事してきました。おそらく今後、そう遠くない未来において、新たなテクノロジーと外科治療とのさらなる融合が予測される場所です。

ACSのような世界的な議論の場は今後も貴重な機会として継続されることに疑いの余地はありません。一方、今や国境を越えた議論がリモート媒体を通して日常的に行われるような環境に変化してまいりました。以前に比べ international meeting が毎週のように開催され、世界は小さくなってきたものだと実感されます。そのよう

な環境変化を感じ、日々後進外科医の指導に当たりながら思うことは、世界のテーブルに座り正々堂々と議論できる外科医になってもらいたいということです。日本人の良さを捨てる必要は全くありませんが、日本の中だけで完結するような議論の収束よりもむしろ、共通の言語、共通の物差しで日本の外科の優位性を躊躇することなく主張してもらいたいものかと思っています。

私自身まだまだ精進の半ばであります。今後も諸先輩方からのご指導をいただきながら頑張ってまいりたいと思いますので、引き続きご指導の程お願いいたします。

最後になりますがこのような機会をいただきました ACS Japan chapter の皆様に心より感謝申し上げます。

略歴

平成5年3月	千葉大学医学部卒業
平成5年4月 - 平成6年3月	千葉大学医学部第一外科研修医
平成6年4月 - 平成7年5月	社会保険船橋中央病院外科医員
平成7年6月 - 平成10年5月	国立がんセンター東病院大腸外科レジデント
平成10年6月 - 平成12年5月	久留米大学免疫学教室助手
平成12年6月 - 平成21年3月	国立がんセンター東病院 消化管外科 医員
平成21年4月 - 平成24年6月	国立がんセンター東病院 消化器科 医長
平成24年7月 - 平成27年3月	国立がん研究センター東病院 大腸外科 外来医長 臨床開発センター内視鏡機器開発分野ユニット長 併任
平成27年4月 -	国立がん研究センター東病院 大腸外科 科長 泌尿器・後腹膜腫瘍科 科長併任 先端医療開発センター 手術機器開発分野 分野長 併任
平成29年5月 -	医療機器開発センター手術機器開発室長 併任
令和3年7月 -	橋渡し研究推進センター 併任 現在に至る

Medtronic

Medtronic Japan Digital

多彩なコンテンツへシンプルアクセスいただけます

詳細はこちら



© 2022 Medtronic.
Medtronic及びMedtronicロゴマークは、Medtronicの商標です。
SI-A683





新 ACS Fellow になりました



国立病院機構 鹿児島医療センター 外科・消化器外科

菰方 輝夫

Teruo Komokata, MD, PhD, FACS

このたび、2021年10月FACSに加入させて頂き、光栄に存じております。ご推薦頂きました先生方、国土先生、長谷川先生はじめACS Japan Chapterの先生方に感謝申し上げます。

私は1987年鹿児島大学を卒業し、平明教授が主宰されていた旧第2外科に入局しました。2外科は当時、循環器・消化器・呼吸器外科を担当し、幅広く外科ができるからというファジーな想いが背景にありました。入局して7年程で、「腹部多臓器灌流」という少し謎のリサーチ・テーマを頂き、福岡県立小倉高校からの同期で、現在、New York Medical College 外科学教授の西田 聖剛先生とブタ腹部多臓器移植の実験研究を行いました(図1)。この間、日本移植学会で矢永 勝彦先生にご質問頂き、冷や冷やお答えしたことを覚えております。

2000年、西田先生がすでに渡米していましたマイアミ大学のJackson Memorial Hospital、Liver/GI Transplant unit に Visiting surgeonとして1年間留学しました。Andreas G. Tzakis先生から真夜中に手術室で、“Are you strong? (まだ余力があるかという意味)”と言われ

たり、術中に“Don't move!”と言われたりしながら、肝移植、小腸-多臓器移植、Autotransplantation、Donor organ procurementなど参加させて頂きました。一方、臨床研究としてMarginal donorからの肝移植成績を検討し、DDW、国際移植学会での発表や2本の論文を手土産とすることができ、High volume centerの威力を体感しました(図2)。マイアミは家族で行っていましたが、VacationをとってCaribbean CruiseやDisney World、Key Westに行ったこともいい思い出となりました。

2001年鹿児島大学に帰局し、坂田隆造教授が教室(第2外科改め心臓血管・消化器外科学)を運営されていました。心臓血管、消化器外科のハイブリッド講座として、人工心肺併用肝切除や心臓・消化器癌同時手術など特性のある手術に関与させて頂きました。

2012年国立病院機構鹿児島医療センター外科・消化器外科に出向となり、地域急性期病院での手術はプライマリーケアや腹腔鏡下手術の割合が増えました。その中で、東京女子医大の本田 五郎先生に鹿児島城山肝胆膵外科フォーラムと

称した会合でご講演に来ていただいたり、学会にラバ膝をもっていったりしました。2019年ヒューストンMD Anderson cancer centerで肝・胆のsemi-closed meeting (EWALT2019)があり、東大の長谷川 潔先生や杏林大学の阪本 良弘先生から毎朝のシャトルバスの中で、東大肝胆移植外科の歴史を伺ったり、テキ

サスのカウボーイがやってきそうなお洒落なレストランで飲食を共にしたりと楽しく実りの大きい思い出となりました(図3)。

米国外科医療の総合力は秀逸と常々感じております。ACSの仲間に加えて頂き感謝申し上げますと共に、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

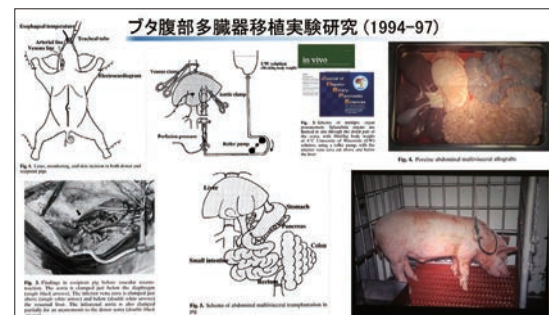


図1

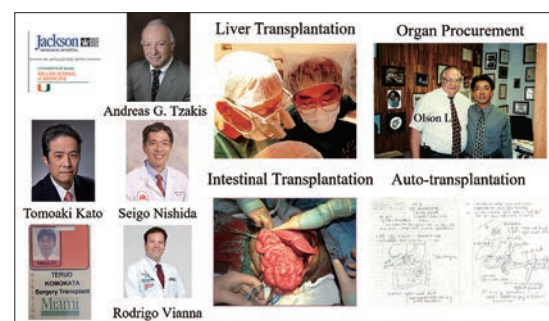


図2



図3

略歴

1987年3月	鹿児島大学医学部卒業
1987年4月	鹿児島大学医学部第2外科研修医
1989年4月	鹿児島大学医学部第2外科医員
2000年8月	米国マイアミ大学 Jackson Memorial Hospital 移植外科フェロー
2001年9月	鹿児島大学大学院心臓血管・消化器外科学講座 助手
2007年4月	鹿児島大学病院 消化器外科 講師
2012年3月	国立病院機構 鹿児島医療センター 外科・消化器外科 医長
2015年5月	国立病院機構 鹿児島医療センター 外科・消化器外科 主任部長 (現職)
2016年4月	鹿児島大学医学部臨床教授 (現職)

OLYMPUS

Reborn Flex Gives You Insight

ジョイスティックハンドルの採用

- ・直感的な操作とスムーズな視野展開が可能
- ・エルゴノミックデザインにより、両手でも片手でも安定した操作が可能

ホールド機能

- ・快適でスムーズな操作性を実現



製造販売元: オリンパスメディカルシステムズ株式会社
販売名: ENDOEYE FLEX 3D 先端湾曲ビデオスコープ OLYMPUS LTF-S300-10-3D 229ABZ00107000
医療機器番号

HD画質で3D観察が可能な先端湾曲ビデオスコープ

ENDOEYE
FLEX 3D

オリンパス株式会社

www.olympus.co.jp



事務局便り

2020年1月から始まったCOVID-19の影響は長く、例年日本外科学会会期中に開催される日本支部会は本年も外科学会そのものがハイブリッド開催（一部は熊本現地開催）となったため、3年連続でvirtual開催の予定となってしまいました。会員が年に1度国内で集まる貴重な機会を得られていないのは残念の一言に尽きます。このNewsletterも2年振りの発行となります。ただ、この間もACS日本支部としての活動を継続してきました。

まず、前President & Governorの矢永勝彦先生からいただいた宿題である日本支部ホームページを2021年2月4日に開設しました。ACS本部のHPからもアクセス可能であり、日本支部の活動を国内外に知っていただくことができます。このHPの整備には当時支部の秘書を務めていた大竹啓子さんが尽力してくれました。この場をお借りして感謝いたします。また、慈恵医大の川瀬和美先生が新Councilorに就任され、女性の立場・視点から支部活動を支えていただくことになりました。現在、ACSのInternational Relations Committeeの委員を務められ、今後のご活躍が期待されます。

さらにRegion 16（日本支部所属のACSの地域分類）の各国代表者によるRegion 16 Meetingを2021年4月8日、“Surgical Practice and Training in Region-16 Countries during COVID-19 Pandemic”をテーマとしてVirtualで開催しました。最初にACS Vice PresidentのRandolph Bailey先生からビデオメッセージをいただき、その後、Australia & New Zealand、バングラデシュ、香港、インド、韓国、日本から各々の地域におけるCOVID-19関連の問題点が紹介され、ModeratorとPresenterで議論しました（写真参照）。関心の高いトピックだったせいか、議論は大変盛り上がり、予定した2時間があっという間でした。当日参加

者も56名を数え、非常に有用な情報交換ができたと思います。何よりもACS支部の横のつながりを強化できた意義は大きかったと思います。

今年のACS本会は10月16日～10月20日、サンディエゴで開催予定です。今年こそ現地に行けると信じ、恒例のカクテルパーティーを計画中です。本年新たにFACSを取得された先生方、2020年、2021年に取得されたが、現地に行けなかった先生方、ぜひこのパーティーでお会いしましょう。



ACS日本支部事務局 長谷川 潔

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学肝胆膵外科医局内

TEL.03-3815-5411 FAX.03-5684-3989 e-mail:acsjpn-admin@umin.ac.jp

New Fellows

新入会員名簿

<2020>

Masaaki Hidaka 日高 匡章（長崎大学大学院移植・消化器外科）
 Kaori Ito 伊藤 香（帝京大学医学部附属病院高度救命救急センター）
 Masaaki Ito 伊藤 雅昭（国立がん研究センター東病院大腸外科）
 Kenichi Iwasaki 岩崎 謙一（東京医科大学病院消化器外科）
 Ryungsa Kim 金 隆史（広島マーククリニック）
 Yoji Kishi 岸 庸二（防衛医科大学校外科学講座）
 Taiichiro Kosaka 小坂 太一郎（長崎大学大学院移植・消化器外科学）
 Kazuteru Monden 門田 一晃（福山市民病院外科）
 Takashi Murakami 村上 崇（帝京大学ちば総合医療センター外科）
 Takashi Ohtsuka 大塚 崇（東京慈恵会医科大学呼吸器外科）
 Yoshihiko Sadakari 貞荊 良彦（聖マリア病院外科）
 Yoshihiro Sakamoto 阪本 良弘（杏林大学医学部付属病院肝胆膵外科）
 Yusuke Sato 佐藤 雄亮（秋田大学医学部附属病院胸部外科）
 Kuniya Tanaka 田中 邦哉（昭和大学藤が丘病院消化器・一般外科）
 Tomoaki Yoh 楊 知明（京都大学医学部附属病院肝胆膵・移植外科）
 Naohiro Yoshida 吉田 直裕（久留米大学外科）

<2021>

Takashi Eguchi 江口 隆（信州大学医学部附属病院呼吸器外科）
 Makoto Hibino 日尾野 誠（名古屋大学医学部附属病院心臓外科）
 Yusuke Inoue 井上 悠介（長崎大学大学院移植・消化器外科）
 Norihiko Ishikawa 石川 紀彦（ニューハート・ワタナベ国際病院）
 Kei Kawaguchi 川口 桂（東北大学病院総合外科）
 Takayuki Kawai 河合 隆之（北野病院消化器外科）
 Kosuke Kobayashi 小林 光助（がん研究会有明病院肝・胆・膵外科）
 Teruo Komokata 菰方 輝夫（鹿児島医療センター外科・消化器外科）
 Yuichiro Mihara 三原 裕一郎（NTT東日本関東病院外科）
 Kenichi Nakamura 中村 謙一（藤田医科大学病院総合消化器外科）
 Ryosuke Okamura 岡村 亮輔（京都大学医学部附属病院消化管外科）
 Tetsuya Tajima 田嶋 哲也（京都大学大学院肝胆膵・移植外科）
 Hidekazu Takahashi 高橋 秀和（大阪大学大学院消化器外科学）
 Takayuki Tanaka 田中 貴之（長崎大学大学院移植・消化器外科）
 Tsuyoshi Tanaka 田中 毅（藤田医科大学病院総合消化器外科）
 Hideki Ujiie 氏家 秀樹（北海道大学病院循環器・呼吸器外科）



抗悪性腫瘍剤

劇薬、処方箋医薬品（注意—医師等の処方箋により使用すること）

ロンサーフ® 配合錠 T15

配合錠 T20

Lonsurf® combination tablet T15・T20

トリフルリジン・チピラシル塩酸塩配合錠

薬価基準収載

効能・効果、用法・用量、警告・禁忌を含む使用上の注意等につきましては添付文書をご参照ください。

文献請求先及び問い合わせ先
大鵬薬品工業株式会社
 〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27
 TEL.0120-20-4527 https://www.taiho.co.jp/

製造販売元



2022年3月作成